学校教育目標　【友愛】心豊かな人創り　【自律】自ら学ぶ人創り　【進取】活力あふれる人創り

常盤のみどり

関東駅伝大会　特別号外　　令和七年　師走一日

さいたま市立常盤中学校
〒 330-0075
さいたま市浦和区針ヶ谷 4-1-9
TEL　048-831-3189
FAX　048-830-1561
E-mail:tokiwa-j@saitama-city.ed.jp

走姿顕心とは　～関東中学校駅伝競走大会を終えて～

校長　　玉崎　芳行

我らがチーム常盤駅伝女子チームの関東大会参加にあたり、御厚情、御厚志を数多賜りました。

先ずもって、地域各自治会様、本校保護者や卒業生の皆様、本校ＰＴＡ会長・後援会会長様をはじめとする関係者各位に、お力添えを賜りましたこと、改めて衷心より感謝申し上げます。本当に有難う御座いました。

11 月 30 日、陽が傾き西の空が茜色に染まっている。上州榛名の麓から一足先に帰校し、１５名のなでしこたちを校長室で待つ…。自然とペンが走り出した。

中学生駅伝関東大会を終えた。もう、あの人たちの清爽な走りを目にすることができないかと思うと、言葉には表せない感情が湧き乱れる。

11 月 29 日早朝、関東大会に向かう彼女たちの出発に、駅伝男子チームの熱い漢たちや３年生女子が駆けつけてくれた。有り難い。誰からも愛される彼女たちなのだろう。全校応援壮行会での温もり溢れる雰囲気や万雷の拍手がそれを物語っていた。

七月、令和７年度常盤中駅伝部が起ちあがった。３年生の勢いが、ひときわ鮮やかだった。彼女たちが今日まで積み重ねてきた練習は、延べ８００㎞を超す。玉のような汗を滴らせながら己の限界に挑む朝練習は、本当に辛かっただろう。同志であり、仲間であり、良きライバルでもあるチームメイトとのハイタッチに、挫けそうな自分が何度救われたことだろう。その度に、彼女たちは“チーム”で邁進し続けてきた。さいたま市大会二連覇を果たし、県大会では第３位と、積み上げた努力は記録に表れ、色褪せることのない記憶となった。しかし、私がいつも心震わされる彼女たちの人としての素晴らしさは、こんなところにも在る。

例えば、大会や校外試走に出向いた際のベースステントでは、ランニングシューズに履き替えた後のシューズが、みな整然と綺麗に揃えてあった。例えば、遠征バスの運転手さんや宿泊先の方々に対し、丁寧で温かい礼節を必ず尽くした。しかも、チームとしてだけでなく、一個人の場面においてでもある。例えば、朝練習で、一年生時から３年間いつも率先して体育倉庫を開けカラーコーンを準備し続けた。

そして、それらの日々を紡いできた彼女たちの大会前夜のミーティングは、生涯忘れることのない夜となった。ここまでの活動を通し、一人ひとりが背負ってきたもの、感じたこと、身につけてきたものを、思い思いの“自分自身のことば”で、チームに伝えあった。

一年生は、練習当初の戸惑いや不安を素直に吐露しながら、先輩方に支えられいつの間にか走ることの楽しさを感じることができるようになったこと。ここまで頑張ってこれたのは先輩方のお陰で、

明日は先輩方に笑顔で終わってもらいたいので、私は自分の役割を精一杯務める。全員で笑顔で学校に帰りたい。と、とても一年生とは思えない立派な想いを発した。（期せずして、上級生から“お～っ、すっげ～！めっちゃハードル上がった～！”と拍手とどよめきが起こったぐらいだった。）

二年生は、“心の成長”を感じた。自分自身を厳しく律しながら、先輩、後輩や先生方への感謝の気持ちをしっかりと言葉にしたことに加え、“次のこと、これからのこと”…先輩からの襷を受け継いだ後のことにまで想いを馳せていた。「すごいなぁ、明日だけでなく、もうその先のことまでも…」視野が広がっていた。

三年生の７人は…本当に人として、美しかった。

仲間のために、こんなにも心を遣い、優しさを携え、尽くすことができる人が、このチームに居る。

常に第一走者のプレッシャーを背負いながらも、チーム全体のリズムと流れを作り続けた誰からも信頼される主将が、このチームに居る。

いつも温かいメッセージが添えられたお家の方の手作り弁当の大切さ、有り難さを心のど真ん中で受け取り、お家の方への感謝を忘れない仲間が、このチームに居る。

辛さも苦しさも、楽しさも嬉しさも、悔しさも焦りも羨ましさも、ありとあらゆる感情を全て受け入れた上で、チームの仲間との絆を紡ぎ続けたあなたが、このチームに居る。

最後に、主将が決意と覚悟を以て結んだ。

“私にとっては、最後の駅伝となる。きっと、これから先、このような競技、駅伝は走ることはない。明日は、最終第５区を走る。みんな…安心して走ってきて。どんな順位だろうが、私が最後、全員を抜く。そして、最後は、みんなで、全員で笑って終えられるようにしましょう。今まで、みんなと、このメンバーで、このチームで頑張ってこれてよかった。ありがとうございました。”

大会当日の走りは、本当に立派だった。前夜のミーティングで誓い合った以上の、魂の込もったチームとして走り切ったラストランとなった。チームテントに彼女たち全員が戻った。応援に駆けつけてくださった保護者の方、ＰＴＡ会長様、後援会長様や先生方、チーム常盤が彼女たちを温かく迎え称えた。主将の胴上げが始まった。彼女がふわっと宙に舞った。期せずして、監督の胴上げも起こった。みな、笑顔だった。１５名のなでしこたちの笑顔は、とびきり輝いていた気がした。

彼女たちが駅伝部で刻んだ足跡は、“伝説”ではなく“伝統”となったのではないだろうか。関東大会、全国大会、関東大会と躍進を続けてきた。しかし、本当に尊いことは、どの大会に進んだか、ではなく、そのステージに辿り着くまでの『走る姿』であり、『人としての生きざま、心の在りよう』だということを、私は、あなたから教えていただいた。心から敬意と拍手を捧げる。

校長室のデスクマットには、一昨年の千葉県柏市で行われた駅伝関東大会での写真がある。今の３年生が１年生の時のものだ。あどけない。もうそろそろ、バスがホーム常盤に戻ってくる。

“お帰りなさい。本当によく頑張ったね。”